ほない歴史通信
第４８号
2008.9.1

シベリア抑留関係展示会を参観して

平成二十年七月二十三日（火）から二十七日（日）にかけて、笠間市立笠間公民館を会場にシベリア抑留関係展示会が、主題「世紀の悲劇を銘記し永遠の平和を祈念して」のもとに、独立行政法人平和祈念事業特別基金、財団法人全国強制抑留者協会主催（実行委員会委員長塩谷全四郎）で開催された。

酷寒の中での木材運搬（展示案内から）

七月二十六日（土）には、「抑留体験の労苦を語り継ぐ集い」が行われた。この集いには、大子町から上金沢の須藤富之助氏（全国強制抑留者協会茨城県支部長）が悲惨な抑留生活の体験発表者として参加しいる。

昭和二〇年（一九四五）八月八日、ソ連は日ソ中立条約を破り、一三〇万人のソ連軍が満州、朝鮮、南樺太に進入し、攻撃をしてきた。日本は八月十四日ポツダム宣言を受諾し、翌十五日天皇の玉音放送があり終戦を迎えた。しかし、戦争は終了した、が、多くの日本人がシベア各地に連行された。

展示会案内の栞は、「戦争が終了したにもかかわらず、在満日本軍人・開拓団・義勇軍・看護婦など六十万人余の人がシベリア各地に強制拉致され、酷寒の地で飢餓と重労働・疫病等により、まさに生き地獄の如き惨状により、六万人余の方々が亡くなられた事実は、決して忘れてはならないし、また風化させることは出来ません。同時にこの冷厳な事実を正しく後世に伝えていかなければなりません。」と、展示会を行う趣旨を述べている

展示は、一階と二階で行われ、会場には体験者の製作した収容所全景、宿舎等の模型、体験者の描いた生活の様子を語る絵画、各地の慰霊訪問等の写真、現地で着用した衣服、酷寒時に着用する防寒衣服、現地手製の日常品、抑留者の身上書、抑留地からの通信葉書、関係者提供の資料等が展示されていた。

抑留者の食にみたされない収容所生活、雪に覆われ、人の息も、樹木も凍結する中での苛酷な伐採作業、馬そりによる木材の運搬、飲料水を入れた樽の運搬、零下二十度の中で耐えてきたぼろぼろの防寒衣服、食料を不公平にならないよう分配するための手作りの秤、食事は一片の黒パンと雑穀スープ等の粗食、飢餓と疾病による死体の放置等の絵画や遺品の展示は、酷寒の中での収容所生活の苛酷さと悲惨さを証言している。

戦後、六十年を経過した今日、苛酷な抑留生活は風化してきている。戦争がもたらした惨状をはじめ、収容所生活の苛酷や悲惨さの事実は忘れてはならないし、風化させてはならない。

抑留展示は、抑留の実態に触れながら戦争がもたらした悲惨さ、平和の尊さを後世に伝えていくために、改めて自分に問い、自分を見つめるよう訴えている。

（小　澤）

茨城新聞に見る「学童疎開」

東京をはじめとして主要都市への連合国軍の空襲が激しくなってきた昭和十九年三月三日，政府は「一般疎開促進要綱」を閣議決定した。次いで，七月十日に「帝都学童集団疎開実施要領」を発表，縁故のない学童は集団疎開することになった。

大子・袋田・宮川に学童疎開した様子を「茨城新聞」が掲載しているのでの紹介したい。

東京都向島，淀橋両区一万六百名の疎開学童受入れについて県は国策の緊急要求に応じ，諸般の準備促進に努めていたが，八月八日各郡駐在視学及び関係町村長を集めて指示した。

「受入学校においては実情並びに地域関係を考慮して関係学級に分散編入して教育を行う。このためには特別教室も活用すべきであり，又当然に二部授業も行うことになる。教育の実際運営に当たっては学校長は県の指示する疎開学童教育要綱に基づきその実情に応じて具体的なる計画を立案し疎開付随教員に対して本県教育の大要並びに当該学校教育の大要について理解を促して教育訓練の万全を期すると共に婦人会，女子青年団等と連絡の上受入児童に対する援護の手をさし延べるため里母或いは郷母，里姉等としての奉仕組織を結成して所謂母代わり姉代わりとしての温かき奉仕活動に期待することになっている。」

「入郷当日は最寄り停車場又は村入口まで出迎え入郷後時機を見て鎮守並びに御真影奉安所等に参拝する機会を作る。入校式は国民儀礼，君が代，奉唱，校歌斉唱，受入側代表挨拶，疎開側代表挨拶を行う。参列者は地方事務所長，視学，署長，町村長，農業会長，翼賛会，婦人会，産土神官等」という。

大子署管内には，大子町が栄屋一二三，麻屋三〇，菊屋八〇，寺田屋六九，北条館五七，大子町願誓寺五〇，永源寺五二など五二二名，袋田村が長生閣三五〇名，宮川村が丸見屋三六，沢ノ井一五，鈴木屋六九の一二〇名の計九九二名であった。

八月十九日，二十日の午後相前後して奥久慈大子町を中心に向島区第一吾嬬，同中川両国民学校の七百十余名が集団疎開した。大子町駅頭には受入側の菊池町長，加藤国民学校長，吉原署長始め千余の学童，婦人会長，青年団一般町民多数が詰めかけて待つほどに，午後三時十分，同五時半と前後して到着。

「駅頭に整列を終わると菊池町長が町民を代表して『ようこそいらっしゃい。元気で仲良く米英撃滅まで頑張りましょう。』と歓迎の第一声，第一吾嬬の川田校長，中川の飯塚校長，次いで疎開父兄代表の謝辞，地元の児童を代表して永瀬幸二君が，お友達を迎えた嬉しい挨拶を贈って歓迎会が終わる。疎開学童は，学友の案内で定められた旅館，寺院等の宿舎へ向かった。」

「一夜を山の街の宿舎に明かした男女四百名は二十一日午前八時受持の先生と一緒に十二所神社に参拝。疎開完了の報告と必勝祈願をこめて大子校御真影奉安殿に礼拝した。」

八月二十二日午前八時からは入校式を開催する。「大子国民学校では集団疎開児童を迎えて校庭で入校式を行った。向きあって学童同志の挨拶，数々の行事が終わると大子少年団訓練に移った。加藤団長から新しい団旗が二十分団に授けられると新団旗の下，堂々の分列行進と大子健児の演練が展開された。見学する疎開学童に明日よりは，仲良く一緒に元気で心身を鍛え上げようと誓って正午近く式を閉じた。」

八月二十三日は校内見学，職員同志の交歓会を行う。

八月二十八日，疎開学童四百名（袋田二三〇余名，宮川四六名）は，午前七時過ぎ，先生に連れられて奥久慈袋田瀧へ行く。「月居山越しに史蹟を訪ねて水戸様を偲び峠を元気に下って流れる汗を長生閣の温泉風呂で洗う。」

翌二十九日は「山野に出て薬草採取。かくて足ならしも心の落ち着きも整った学童達はいよいよ九月一日から初登校大子校の児童となって戦い勝つまで手を取り合って進軍するのだ。」

その後の様子はどうであったのか，調べていきたい。（野内）

八溝川の四季

安藤政蔵

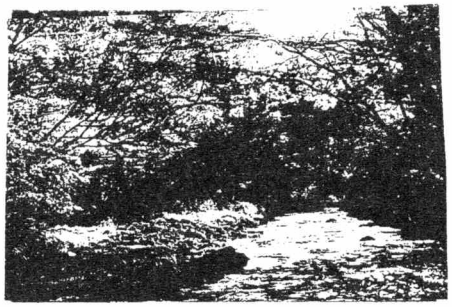
「雪がとけたらどうなるか」という先生の問いに、春になる、と答えた子どもがいたという。雪がとければ水になるのは、明々白々のことであるが、春を待ちかねている者にとっては、雪解け即、春の到来となるのであろう。これは教室で実際あったことなのか。作り話なのかはわからない。

さて、茨城県内で雪が多いのは、八溝地帯である。山は白銀一色となり、雪国の様相を呈する。八溝地帯も、雪や氷が融けて流れ出すと、春が訪れる。風も水もまだ冷たいが、春を待ちかねた生き物達の息吹が、そこここに感じられる。探石中に口ずさむのは、情景ぴったりの「早春賦」である。

春は名のみの風の寒さや

氷解けさり葦は角ぐむ……

土手にフキノトウが顔を出しているのを摘みとり、持ち帰る。このほろにがさは、早春の味といえよう。このあたりは、梅が開くのが三月で、桜は四月中下旬に、山桜はその後に咲く。



八溝川秋景

五月は若葉の季節となり、八溝神社の「ぼんてん祭」を迎える。麓の氏子達は五穀豊饒を祈願して、前年に収種された農作物、干瓢、麻、餅等で、一・五メートルくらいの鉾に飾り付け、神輿に似たぼんてんを作る。若者達がぼんてんを山頂へ担ぎあげて、壊れるまでもみあってから、神社に奉納して祭は終わる。

この辺りは、茶どころで、日当たりのよい傾斜地に茶畑が広がっている。五月から六月にかけて、鯉のぼりが泳ぐ下で、茶摘み風景が見られる。

この時期、堤の竹林で筍がとれる。淡竹（はちく）の筍は風味がよく、探石時の楽しみになっている。

七、八月、夏の探石は陽射しが強く、水の中に入っても暑い。けれど、木陰や岩陰に入ると涼しく、ほっとする。淵の岸壁には、いわたばこや大文字草の群生が見られ、心がなごむ。

上流の小田貝付近を探石していたとき、十株程の山葵（わさび）を見つけた。採ろうとして手をのばしたが、どうもおかしい。誰かが秘かに栽培しているものらしいので、採らずに立ち去った。

秋、八溝川の紅葉はひときわ鮮やかで、川面に映えて絶景である。探石に疲れた目を、休ませてくれる。不思議なことに、景色のよい所から佳い石が出るのである。石も景色の佳い所を好むとみえる。

秋の川での収穫物は、銀杏（ぎんなん）と胡桃（くるみ）である。木から落ちて、流れにもまれてきれいな実になり、おあつらい向きに浅瀬に溜まっているので、有り難い。

冬は、川の水が減っているので、探石には最適である。といっても、それは雪が降る前までで、雪が積もってしまえばお手上げである。今まで、この渇水期の川で、いくつも佳石を揚げてきたのである。

八溝山と同じ大子町の袋田の滝は、流れが四段であり、四季それぞれ美しく、四度も訪れるところから四度の滝と呼ばれる。八溝川の四季も、これに劣らず美しい。四季のうつろいを味わいつつ、季節に応じた自然の恵みをいただいて、探石は実にぜいたくで有り難いことである。

（常陸太田市在住）

【昭和の初め頃の農家六】　麦を作る

この辺は畑作地帯だから、米と同時に麦を作る事が多かった。米だけでは食料に足りなかったのだ。

秋になり田んぼの仕事が忙しくなる頃、畑の仕事も忙しくなる。畑では麦蒔き、こんにゃく堀りなどの仕事がいっせいに始まり、次から次へと仕事に追われる。

麦を作るには先ず畑を耕す事から始まる。今の様に耕耘機やトラクターなどはなかったから、殆ど鍬で耕した。俗に「畑うない」と言い重労働だった。朝早くから時には"夜畑"と言って夜まで畑うないをする事があった。子供でも手伝わされる事があったが、鍬は重いし力がないので深く耕す事が出来ず、腰は痛くなるし疲れるしで、とても仕事にならない。

上手になると"七鍬さくり"と言って一回のうない巾を七回で終わる様にやる。慣れない人は一〇回も一五回も鍬を振る事になり疲れてしまう。こういう力仕事を毎日やるのだから、農家の人は腰が曲がったり、エネルギー源のご飯を沢山食べないと持たないので、胃が悪くなる人が多かった。

畑うないが終わると畝をきり、堆肥を施し麦を蒔く。麦を蒔いた後は足で土をかける。畝をきる時は綱を引いてまっすぐな畝にする。こうすれば後の仕事、中耕や草取り麦刈りなどが楽になり、麦の生育にもいい。

やがて芽が出て伸び始める。蒔くのが十一月頃だから芽が出て間もなく冬になる。麦は稲と違って寒さに強い作物であるが、冬中に土が乾燥したり霜柱で根が浮いてしまうと枯れてしまうので麦踏みや土入れをする。

麦踏みは足で麦の上を踏みしめて歩く、そうすると根は土にしっかり根ずく。土入れは少し伸び始めた麦に鋤簾（じょれん）という道具で土をすくい取って露出した根に上から振り掛ける。根を乾燥や寒さから護るためである。麦踏みや土入れは子供でも出来るので手伝った。

春になると麦はすくすくと伸び始める。土寄せをしたり草を引いたり手入れをして五月になると穂が出始める。穂の中には黒穂病の為に真っ黒な穂が出る事がある。こういう穂は抜き取ってしまうのだが、子供はその麦の茎で麦笛を作って鳴らして遊んだ。

六月になると麦は黄色く色付いてくる。田植えやお茶摘みなどの仕事との都合を見て麦刈りをする。刈り取って束ね棚に掛けたり脱穀、乾燥するのは稲と同じように行う。

畑が少ない地方では、「田麦」と言って田んぼに麦を作る事がある。稲刈りがおわったあとの田を耕して麦を蒔く。

この方法は春になって麦を刈ってから田植えをするので、田植えが七月頃になってしまう事がある。

麦には大麦、小麦、裸麦、ビール麦などがあるが、大子地方で多く作ったのは大麦と小麦である。大麦は米と一緒に炊いて麦飯として食べ、小麦は粉にしてうどん、パンなどに加工して食べる。そのほか味噌や醤油の原料になり、またお菓子を作る材料になった。

脱穀したあとの麦わらは稲のわらよりも堅いので、わら屋根と言われる様に、屋根を葺（ふ）く材料にしたり、畑に覆いをして草が生えるのを防ぐために使うほか、風呂や竈の燃料にするなど様々に利用された。

（石井）

じゅうおうえん信仰（一）

～大子町上金沢地区～

大子町上金沢地区の橋場、荒屋、鎮ケ内、天神平、高内の各集落（坪）で十王講を行っている。十王は「じゅうおうえんさま」と呼ばれ、各坪ごとに行う日取りが決められて春秋の彼岸（中日）、夏（旧盆の十六日）、冬（一月十六日）に行われている。十王とは冥界（冥土）にあって死者（亡者）の罪を裁く十人の王をいう。いずれも仏菩薩の化身とされる。十王信仰は、人が死後冥界において順次十人の王の審判を受け、生前の善行悪行が罰せられ、罪の軽重が決定される。その罪の程度に応じて、人は自分にふさわしい苦堺に堕ちて行くと信じられていた。

冥土の裁判官として最も有名なのは、閻魔大王でもとはバラモン教の人類最初の死者であったが、仏教に取り込まれて、後は餓鬼会の王、地獄会の王、また、地蔵菩薩の化身とも称せられ畏怖、崇敬された。

地獄の閻魔大王

人が死ぬと、冥土に行く。冥土には生前の悪行を裁く１０人の王がいる。そのひとりが有名な閻魔大王である。

人は生まれた瞬間から死へ向かって歩いてゆく。人は死んだらどんな世界にゆくのか。死後の世界を「あの世」とか「冥界」「冥土」などと呼ばれているが、人々にとって死後（亡者）は、極楽の世界の往生があこがれの的であった。

こうした考え方は、平安時代の世の中の乱れから浄土教の高揚とともに、ますます極楽往生を望むようになった。反面地獄への恐怖も強調され、人々にとっては重大な関心事となった。室町時代になって、人々に仏教が浸透するるにつれて死者への仏事（追善儀礼）と十王信仰が結び付いて、人の死後の仏事として初七日、中陰（四九日）、一年忌、三年忌といった仏事が広く人々に普及していったのである。

十王信仰は、人々の死後、冥界（冥土）には十人の王がいて、亡者は順次十人の王によって生前の所業の審判を受け罰せられるというもので、十王は十の仏事（供養）に応じ、次のように配されている。

初七日―秦広王
二七日―初江王
三七日―宗帝王
四七日―五冠王
五七日―閻魔王
六七日―変成王
七七日―泰山王
百か日―平等王
一　年―都市王
五年―五道転輪王

地獄に行った亡者は、まず初七日に秦広王の裁きを受ける。ここで罰と行く先が決まらなければ、次の二七日に初江王の審判を受ける。そこで決まらなければ次へというように、順次裁判を受け、地獄の責めや苦しみに堕ちて行く。上金沢地区のじゅうおうえん講は、亡者を地獄の苦しみから救い、極楽往生への願いであり、また、現世に生きる自分たちの極楽往生への願いである。

上金沢地区のじゅうおうえん講の行われ方について、鎮ケ内坪の横倉さんの話を聞くことができたので紹介する。

上金沢地区のじゅうおうえん講は、坪単位を中心に春、夏、秋、冬の年四回坪回りで行われている。春の彼岸（中日）は、天神平坪（午前中）、鎮ケ内坪（午後）、夏（お盆の十六日）は荒屋坪、秋の彼岸（中日）は橋場坪、冬（一月十六日）は高内坪と清水坪、鎮ケ内坪と天神平坪は、以前は一緒に行っていたが二つにわかれ、十王掛け軸を利用する関係上、彼岸の中日の午前と午後に行っている。

春の彼岸の中日に行われる鎮ケ内坪の頭屋（当屋）横倉さん宅を訪れた。講は午後一時から行われたが、講の行われる部屋には、十王の掛け軸十幅、十三仏の掛け軸一幅、六道能化地蔵菩薩の掛け軸一幅が整然とかけられたいた。これらの掛け軸は、掛ける順序が決まっており、十三仏、秦広王、初江王、宗帝王、六道能化地蔵菩薩、五官王、閻魔王、変成王、泰山王、平等王、都市王、五道輪転王の順に掛けられている。

地蔵菩薩の掛け軸の前の机には、頭屋が用意した灯明台や線香をたてる香炉が置かれ、供え物として千切りにした大根の白和えがお重に入れられてが供えられていた。以前は大根の白和えをはじめ、手作りのだんご、まんじゅうなどを作って供えたが、現在は簡略化し、大根の白和（しらあ）えを供えるだけになっている。大根の白和えは、日常生活では食べないが、この日は「おごふ」だからといって念仏途中に間をとってたべる。

坪の人たちが線香を立て、お参りがすむと、念仏に移る。頃合いをみて誰かが「念仏をはじめましょう」といったら、念仏をはじめる。念仏は最初に「こうみょうへんじょう」、次いで、「なむあみだぶつ」などを唱え、最後に「十三仏」の念仏を唱える。十三仏が終わると、頭屋の「おまるめが終わりました。本日はご苦労さまでした。」の挨拶で講は終わりになる。（小澤）

編集後記

季節の移り変わりは早いもので、朝晩の涼しさが心地よく、もう暦の上では立秋を過ぎました。

さて、来月には「ふるさと歴史講座現地めぐり」を開催いたします。この講座は、郷土の歴史を現地で学び、大子町を再発見するというものです。今回は那珂川町、大田原市を訪れ、那須地方における光圀ゆかりの歴史を探訪するコースです。馬頭院の「地蔵菩薩や馬頭観世音菩薩」や栃木県立なす風土記の丘資料館、そして笠石神社の「那須国造碑」を見学します。当時の資料から現代の私たちに何かを語りかけているような気がいたします。歴史に興味ある方、関心のある方、ひとときの「いにしえの世界」にひたってはいかがでしょうか、是非参加をお待ちしております。

（佐藤治身）

編集人　斎藤　典生（茨城大学人文学部）
野内　正美（茨城県立日立商業高校）
石井喜志夫（元　教　員）
小澤　圀彦（元　教　員）
佐藤　治身（大子町教育委員会）

編集発行　遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町池田二六六九番地
〒319-3551　☎0295（72）2627